

## 八幡平の魅力増進のための企画・制作支援 ～安比 Art Project～

人文社会科学部人間文化課程（芸術文化）／教育学部中学校教育コース（美術）  
ヴィジュアルデザイン研究室学生グループ  
（発表者：千田彩梨・岩館実音）

指導教員：教授 本村健太（人社・芸文）

### 序

岩手県八幡平市の安比高原は、東北でも随一のスキーリゾートであり、かつては首都圏からも夜行バスが列をなして集まるブランド力の高いスキー場であったが、近年はスキー人口の減少もあり、集客が低迷して認知度も低くなってきている。安比高原では、2021年度に海外のインターコンチネンタルホテルグループにブランドチェンジ、2022年度にはハローインターナショナルスクールが開校、スキー場の統括には元オリンピック選手で全日本スキー連盟のマーケティング改革を導いた皆川賢太郎氏を迎えて大きな変革を進めているところである。この流れに乗りつつ、安比高原スキー場や「雪質の魅力増進連携会議」（㈱八幡平 DMO、㈱岩手ホテルアンドリゾート、八幡平市等）との関わりの中で、岩手大学の学生による「安比 Art Project」としての作品展示やこの地域に関わる企画提案など実施することによって八幡平の魅力増進につなげたい。

本件は令和4年度の地域課題解決プログラム「ヴィジュアルコンテンツ制作・企画支援による八幡平の魅力増進～八幡平魅力増進プロジェクト～」において当初予定していた雪上のプロジェクションマッピングの代わりに、株式会社岩手ホテルアンドリゾートの企画していた「安比 Art Project」の支援にシフトし、その枠組において学生企画による作品展示「岩大アート GROOVE IT」（図1）を開始したところである。その補完も必要であることから、今年度はこの支援活動を引き続き、継続していくことになった。



図1：令和4年度「岩大アート GROOVE IT」の展示作業

## 令和5年度地域課題解決プログラム

本地域課題について、岩手大学人文社会科学部／教育学部のヴィジュアルデザイン研究室学生グループ、そして卒業研究として高橋眞奈美が実施した「〈八幡平魅力増進プロジェクト〉に関わる作品制作研究」の取り組みについて以下に報告したい。

### I. 本研究課題について

#### (実施計画・方法)

まずは、本研究計画に興味を持って関わる担当学生を複数集めてグループを形成して、卒業研究、または関連分野の体験学修としての枠組みを明確にしていく。この学生グループを中心にスキー場を統括する皆川賢太郎さん（窓口：株式会社岩手ホテルアンドリゾートの畠山衣吹さん）や「雪質の魅力増進連携会議」の柴田亮さんなどの代表者と協議を行いつつ、具体的な実施内容の詳細を詰めていくことにする。

スキー場は、地域の冬の雇用創出、近隣の民宿などの事業機会の創出、また多くのスキー客による飲食や買い物の消費活動など地域への波及効果が高く、スキー場の活性化がそのまま地域の活性化につながるとされている。冬季はもちろんのこと、四季を通じたイベント等の支援のために、現地調査・活動を複数回実施して、学生が若い世代の代表者として関わることで、「八幡平の魅力増進」という課題に連結できるようなアートプロジェクトの企画・提案・実施・参加に新たなアプローチの糸口を探る。

#### ○方法

令和4年度から引き継がれていた事項に応じて、令和5年度の研究課題においては、大きく次のような内容で行うことを計画した。

1. 学生作品の展示活動の継続実施
2. 安比高原スキー場で開催されるアートプロジェクト等の支援
3. その他、八幡平の魅力増進につながる活動

以下に、今年度における研究活動の経過について報告する。

### II. 今年度における研究活動の経過について

#### (結果・考察)

#### ○無人駅・荒屋新町駅に関するデザインシンキング課題

・荒屋新町駅（JR 東日本 花輪線）は、2023年3月18日から無人化された。この駅（駅舎）をデザインやアートで利活用できるか、という課題を㈱八幡平 DMO の柴田亮さんからいただき、デザインシンキングの一環として学生個別に検討した。

[デザインシンキング]

無人駅・荒屋新町駅のアート・デザイン関連での活用可能性について

デザインやアートでの利活用については、駅の外観や内装自体をアートに活用するというよりも、古き良き見た目は手を加えずにそのまま残し、人気アーティストたちのMVやアニメなどの舞台として活用させるのが良いと思う。また、近年は一昔前よりもボーカロイドが広く知られるようになってきたので、人気ボカロPのボーカロイド曲のMVに登場させるなども良いと思う。そして、聖地巡礼による集客を見込んだうえでパネルや原画の展示などを行うのが、昔から利用してきた地元のご高齢の方にもマイナスなイメージを抱かれにくく活用できる最善の方法だと思う。

（那須川莉帆）

## 令和5年度地域課題解決プログラム

同じように無人駅である青森県の田舎館駅に行ったことがあるが、駅の内部一面に GOMA さんというアーティストの絵が描かれていて驚いた。地元の人だけでなく周辺の地域からも人が集まり、SNS でも反響があったと聞いた。

荒屋新町駅もこのように、アートに活用できると思った。駅構内の一部に作品を展示するのではなく、駅全体をアートとして利用することで、他の駅にはない魅力が生まれると考えた。また、外装など元々あったところを生かすことで、地元の方々の愛着をより高められると感じた。

(田村唯李子)

作品展示スペースをつくれればいいと思う。

例えば

- ・安比塗漆器の展示
- ・八幡平市荒屋新町商店街で行われている体験工房の宣伝(体験の様子を映像で流すなど)
- ・七滝や安比高原、八幡平の山岳の写真展示、学校の授業の一環として生徒に描いてもらう(デッサン会)

→自然豊かアピール

(瀬川純令)

見たところ、シンプルで変哲のない駅に見えます。青森県の田舎館駅には青森出身のアーティストである GOMA さんが無人駅にびっしりと絵を描いて話題を呼びました。(参考: <https://withnews.jp/article/f0200519002qq0000000000000000W06910201qq000021159A>)

ここまでとは言わずとも、駅の中にそのまま絵を描いてしまうというのはいいアイデアだと感じました。イラストで賑やかになり何もないより活気が感じられると思います。

更にこの駅周辺の住人や子供を集めて駅に絵を描くというワークショップイベントにしてしまえば街のイベントになり地域の活性化にもつながると考えます。

(島田真愛)

私はアートの背景に特殊性を加えることでこの駅を利活用する案を考えました。駅は学生や専業主婦、ご老人や仕事の出来ない精神病などの何らかの理由がある生活保護などの人々に元々は駅員が使っていた(居)場所を与え、彼らは駅の清掃やガーデニングを行う。このガーデニング時にアートが関わってくる。企業は企業の福祉活動の一環としてその活動を支援する。支援といってもエプロンやスコップの支給といった物的な一次支援である。

老人や精神患者などの人々は自己表現の機会が少なく、専業主婦は気分転換になるような集合する機会が少ない。企業をかませたのは資金的な面もあるが学生へのメリット作成でもある。身内の自治体が営むボランティアよりも企業が絡んだ活動への参加の方が正直就活や何かのエピソードトークとしては客観性があり、見栄えが良いと私は個人的には思っている。良い悪いではなく、自分の家の雪かきよりも近所の家の雪かきをした話の方が自分へのメリットが少なく見える分、「善意」が強調されると私は感じているのだ。

ガーデニングはグリーンカーテンから始めて、次第に線路周辺の景観に至っていくと良いと思う。グリーンカーテンはある程度早く成長してくれるし、見た目のインパクト的にもわかりやすい。企業への活動報告や活動を周知し興味を持ってもらうためのとっかかりとしては良いと思う。グリーンカーテンをどこにどのように何の植物で行うのかはメンバーに決めてもらう。

さて、「撮り鉄」といわれる人がいるように美しい電車の写真は人の心を動かす魅力があると考えられる。そこでメンバーには住民やネット民などいろんな人をまきこみつつ線路沿いの景観もデザインしてもらい、最後にはみんなで電車を撮ってコンテストでも行い、公式な駅の写真を更新してもらいたい。

冬はもちろん雪かきやデザイン案の考案、吟味、植物の発注などの期間である。



## 令和5年度地域課題解決プログラム

地元の人々が地元の企業の助けを受けつつ地元の駅を改革していくというのは、大抵の人の目には好意的に映るだろう。

私はデザインの背景に物語を加えることに荒屋新町駅を利用したいと思います。  
(吉川優良)

荒屋新町駅の歴史を見ると、かつて「鉄道の町」と呼ばれ、SL(蒸気機関)があったのだと分かりました。また、駅舎のなかは、比較的綺麗だと言う印象を受けました。特に、白い壁が目に入りました。そこから、蒸気機関をモチーフにしたアートを壁画のような形で展開していけば、フォトスポットにもなるし、独自の特徴を活かしたアートなので、唯一無二ということで人々が集まってくるのではないかと考えました。

(菊池百花、鎌田真緒)

この駅の待合室を、過去に走っていたSLの内装を再現したデザインにするとよいのではないかと案が出ました。かつてこの町は「鉄道の町」と呼ばれていたり、SLが通っており今でもその設備が一部残されているという資料を見ました。そこで、駅の中で、かつてのSLに乗っている気分を味わえるような、乗車を疑似体験できるデザインになると面白いのではないかと考えました。駅員さんの窓口として使われていた場所から全体の写真を撮れるようなスペースにするなど、フォトスポットにもなると良いと思います。

(鎌田真緒、菊池百花)

荒屋新町駅は無人化を受けて、アートの背景に特殊性を加え利活用してはどうだろうか。学生や専業主婦、老人、生活保護を受ける人々に元々の駅員の場所を与え、清掃やガーデニングを行い、企業の支援を受けて地域の人々が参加しやすいようなイベントを開催する。グリーンカーテンを使い、線路周辺の景観を美しく整えたり、「撮り鉄」と呼ばれる電車の写真愛好家を巻き込み、線路沿いのデザインを行い、公式な駅の写真を更新するコンテストも行う。このような地元の人々が地元の企業の支援を受けながら駅を改革する取り組みで、アートの背景に物語を加えることで駅の魅力を高めたいという考えだ。

(田頭由希乃、吉川由良)

荒屋新町駅(JR東日本 花輪線)について

①2Fは駅長(宿直)室?

→ 駅長体験コーナーとか?

→ 2Fから見える景色を基にしたイラスト・絵画の展示! 2Fからの景色と絵とを交互に見れる

→ 2F縛りにしなくても良いかも。

見える景色とそれをモチーフにしたイラスト・絵画など、それぞれ対応する方向に置く。

「絵の中の荒屋新町駅」の疑似体験みたいな。

②雪がいっぱい

→ 雪像を作ってみるのもアリ?

→ 雪像づくりと言えば自衛隊

→ 地域貢献で公報に繋がるので協力してくれるところはありそう

付近に安代小中学校がある

→ 生徒たちも巻き込んで(地元を巻き込んで)やれたらいいのでは?

雪像じゃなくても、大きなパネルにみんなで絵を描くのも良さそう。

※そもそも「駅」とは?

・地域の足を支えるもの

→ 「みんな」のもの

→ 何か行うとして、「みんな」が楽しめるものでなければならないのでは?

## 令和5年度地域課題解決プログラム

→ 体験・実践を通して「当事者性」＝「自分たちの駅」という意識に繋がれると良い？  
(阿部駿輝)

八幡平では「安代りんどう」の栽培が盛んで、国内シェア35%以上であるようだ。また、海外においても青い花は希少でありながら、聖母マリアを象徴する色として神秘的で人気があるようだ。これらより、世界に誇れる「安代りんどう」を生産地から強くアピールするために、駅舎をりんどうを使った青や紫を基調にした装飾にして、外にはりんどうをモチーフにしたオブジェや作品を設置すれば、電車が通る時にもりんどうを感じられるし、地元住民にもりんどうを身近に感じてもらえる。また、「安代りんどう工房」というところではりんどうでの染め物や雑貨も作っていると知って、駅の中ではギフト、プリザーブドフラワー、花束、ハーバリウム、染物、雑貨、お香・香水など、りんどうを使った商品を販売したり、これらを作る体験や、いけばなの体験などをしたりできれば、販売や体験を通して駅を利活用出来るのではないかと考えた。また、りんどうをモチーフにしたカフェなども併設すれば地元住民の憩いの場になるのではないかと。

(戸島響)

景観が良いので緑を出してエモーショナルな雰囲気のある空間があるといいと思う。浅い考えかも知れないが、思わず写真を撮りたくなるような場所＝いい場所と考える。

その他考える活用方法

- ・アーティストが作品を発表する場にする
- ・小さな博物館にする
- ・地域の食べ物を使った食堂

(永洞奈都実)

- ・駅の窓を横長にし、空いたスペース（白い壁）に八幡平市ならではの絵（石割桜、紅葉、スキーなど）をペイントする。
- ・表側の屋根の上に横長の看板を置き、そこにインパクトのある文字（『春夏秋冬楽しめる地 荒屋新町』など）を書く。
- ・駅のホームや中などに「こくっち」（県北エリアのわんこきょうだい）の看板を設置し、荒屋新町駅の魅力や案内といった吹き出しと一緒に設置する。

(松田美咲)

この駅を利用し、若者が好む「インスタ映えスポット」を展開し、少しでも観光客を増やそうとする取り組みに活用できると考える。駅内の壁にイラストを描いたり、置物をおいたり、また、訪れた客が自らイラストを描けるペースを作ったりしたらいいのではないかと考える。また、「きっぷうりば」の窓口を利用し、ドリンク販売やスイーツなどを販売することで、その場所も有効活用できるのではないかと考える。そしてそのような販売を始めたとしたら、「みちのく号」を利用した方に荒屋新町駅の店で利用できるクーポンをプレゼントするなどすることでよりな少しでも人を集めることができると考える。

(遠藤珠羽)

建物自体とても時代を感じるような趣のある駅で、取り壊すのは勿体無いように感じた。それこそジブリのワンシーンに出てきそうな雰囲気が漂っているので、現代的なアートではなく、少し懐かしい雰囲気のあるアートで駅の中を満たしたり駄菓子屋を設置したりして、駅自体を生かしながらも懐かしいデザインを加えて、子どもの頃を思い出させるような美術館兼観光地出来るのではないかと考えた。

(千田祐菜)

## 令和5年度地域課題解決プログラム

荒屋新町駅がある八幡平市の子供たちが描いた絵を、展示する施設として利用できると考える。子供の絵を飾ることでその子の家族や近所のご老人が見に来てくれるのではないかと考える。

(上日向花菜)

—  
以上。

### ① 荒屋新町駅 デザイン案

- 元々の駅舎が築地だったため、色彩やかに仕上げられた
- デザインは、層岡市の花である「ワキウバ」をモチーフとして取り入れ、色も花の色合わせ、紫・緑を中心に使用しました
- 目に留まるデザインを目指しました



### 荒屋新町駅デザイン案

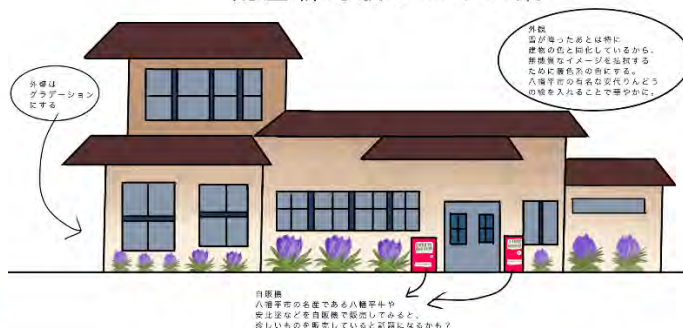


図2：荒屋新町駅デザイン案（制作：長岡希歩・石山咲来）

本課題に関しては、実際に原案が採用され、なんらかの方法で実施が検討されるという段階のものではないため、学生側の多様な発想の原案（図2含む）として柴田亮さんに提出し、現地の若手の方々にも共有いただけるということになった。

## ○安比 Art Project での展開の可能性を探る制作体験

・令和5年7月3日（月）・4日（火）

安比高原スキー場における「安比 Art Project 岩大アート GROOVE IT」の展示作品の可能性として「アクリル・ポーリング・アート」（図3）を体験した。（参加者：高橋真奈美・笹谷成美・島田真愛・橘鈴茄・千田彩梨・長岡希歩・鎌田真緒）



図3：アクリル・ポーリング・アートの体験

## ○安比 Art Project の支援 - 雪上車のペインティング

安比高原スキー場で開催されるアートプロジェクト等の支援については、令和4年度の映像インスタレーション（蜷川実花）にスタッフ参加したような活動の要請はなかったが、皆川賢太郎さんより、古い雪上車（図4）のペインティング（テーマは「SAVE THE SNOW」）について、打診があった。活動の時期とペインティングのデザイン案について調整していくなかで、実施時期については安比に泊りがけでできるように夏休み中を予定した。しかしながら、デザイン案（図5）については当初、なかなかいい方向性が見いだせなかった。



令和5年度地域課題解決プログラム



図4：課題となった安比雪上車のペインティング（黄色い雪上車が対象）



令和5年度地域課題解決プログラム

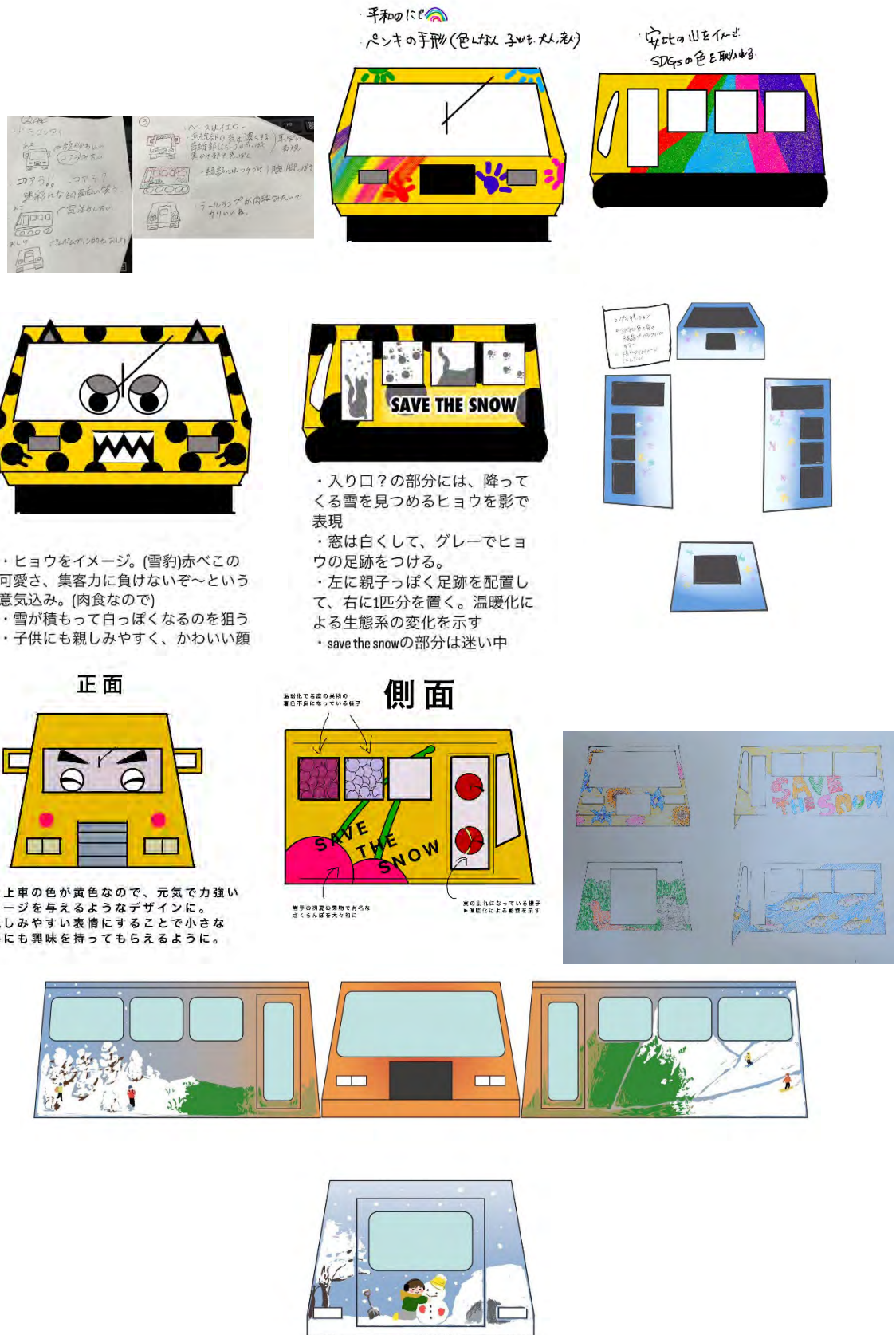


図5：当初の安比雪上車ペインティング原案  
(提案者：阿部駿輝・橘鈴茄・管莉怜子・石山咲来・高橋真奈美・谷地夏美)



## 令和5年度地域課題解決プログラム

令和5年8月3日（木）、Zoom会議（皆川賢太郎さん、畠山衣吹さん、高橋眞奈美、本村健太）によって、雪上車ペインティングの方向性について再確認した。当初の学生案においては、デザイン的な要素が色濃かったが、皆川さんからはもっとアート寄りのものを求められていることが分かり、ペインティング実施日までに再検討することにした。配色については、「レモンイエロー」（ホテル外観のカラー提案：グラフィックデザイナー亀倉雄策）をベースカラーとし、コーポレートカラーの「水色」や雪の「白」を使うように決定した。

令和5年8月9日（水）・10日（木）、学生7名（高橋眞奈美、阿部駿輝、管莉怜子、橘鈴茄、千田彩梨、長岡希歩、谷地夏美、引率：本村健太）がANAクラウンプラザリゾート安比高原（旧：ホテル安比グランド本館&タワー）に一泊して、雪上車の公開ペインティング（アーティスト・イン・レジデンスの様式）を行った。（図6, 7）参加した学生たちのその場でのインスピレーションによって、自由にお互いが共鳴するようにペイントしていった。



図6：雪上車の公開ペインティング





図7：雪上車の公開ペインティング作業風景





図8：雪上車「SAVE THE SNOW号」の完成





図9：雪上車「SAVE THE SNOW 号」の部分の切り取り

テーマは「SAVE THE SNOW」ということで、大きくは雪資源を守る地球環境問題にもつながっている。結果として、ペイントされた雪上車「SAVE THE SNOW 号」は、いっしょに記念撮影をしたり、好きな絵柄を切り取って楽しんだりもできる作品（図8, 9）になり、安比高原スキー場に展示されている。（冬季には雪上を走行する。）



## 令和5年度地域課題解決プログラム

本件については岩手大学のホームページのイベント枠でも情報公開されている。

岩手大学の学生が安比高原スキー場にてアートプロジェクトを展開中：

<https://www.iwate-u.ac.jp/info/event/2023/08/005833.html>

### 雪上車ペインティングに関する参加学生の感想：

今回の活動を通じて、アートがより社会的テーマを身近に伝える要素になり得ることを改めて感じました。実際にペインティングをしている間も何をしているのか、どんな活動なのかと興味を持ってくださる方が多くいらっしゃいました。このライブペインティング自体は大々的に広報をしたわけではないので、今回実際に活動を見た方のほとんどはこの日に偶然安比高原スキー場へ来た方です。そうした方にも興味を持ってもらえた、SAVE THE SNOWのことを知ってもらえたという事実があったことからこの活動の意義はあったのではないかと考えます。文章で伝えるより印象的に、明快に伝える方法として自由な発想とテーマを持って表現ができるアートの良さを生かすことができる活動だったと思います。そして岩手大学の学生の力が役立ったのであれば私も嬉しく思います。活動してみて私も普段扱わない大きさの作品が完成したことが思い出になりました。また、後輩とアートに関わる活動をするのができとても楽しかったです。

(高橋眞奈美)

今回安比でペインティングの活動をさせてもらった。車にペインティング自体初めてだったので貴重な体験になった。まず、自由にみんなと描くことができとても楽しかった。アートには正解がないからこそ完成するまではどうなるのかと少し不安だったけど、とにかくぱっと見た時にすごいと思えるようなものをかけたのではないかなと思う。私たちのアートに触れる際に「SAVE THE SNOW 号」というものがどういう意図で作られたのか、1人でも多くの人に伝わって欲しいと思った。

(管莉怜子)

事前に決定していた色やデザイン、save the snow というメッセージの方向性の中で、皆川さんも自分たちも満足できる仕上がりに持っていく過程と非日常感に、新鮮な楽しさを感じた2日間でした。自分たちにしかできないデザインとはなにか、そして限られた時間の中で形にしていく緊張感の中で学んだことは多く、非常に貴重な経験をさせていただきました。私は以前から、ある意味自己満足で終わりがちな側面もあるアートを活用して、何らかの地域課題解決に繋がりたいと考えています。しかし自分でアートを生かした地域貢献がしたいと思っても、何からどう始めれば良いのか具体が決まらず、ほとんどアクションを起こせていなかった状況で、今回の活動に参加させていただきました。微力ながらも安比をアートで盛り上げる活動ができ、私にとって心に残る経験となりました。

錆び始めた雪上車のメンテナンス含め、独自性のあるデザインの中で地球環境問題を啓発し、意味の深いペインティング活動を行うことができた一方で、反省点も残っています。ペインティング作業に集中しすぎたあまり、来場者とのコミュニケーションが積極的に取れなかったことに、振り返ってみると気が付きました。もっと積極的な来場者とのコミュニケーションを意識できれば、より意味の深い活動になっていたと思います。

活動のまとめとしては、安比高原に来ていただいた方に save the snow 号を見て知ってもらうことで、環境問題を考えるきっかけ作り、さらには各々が雪上車の中でお気に入りの絵柄を発見してもらえる段階までいければ、このプロジェクトは成功といえるのではないかと思います。これからの雪上車の活躍を期待すると共に、個人の活動として SNS を通じた発信活動も行い、より多くの人にも知ってもらうことを目指します。

今回の経験を、これからの研究活動、そして芸術活動に生かそうと実感しました。

(千田彩梨)

### ○安比 Art Project「岩大アート GROOVE IT」の作品展示活動

安比高原スキー場における学生作品の展示については、令和4年度の卒業研究として田屋千咲がまとめた「楽しむ」という意味合いの「groove it」をテーマとして活動を継続することになった。

令和5年8月9日（水）・10日（木）の雪上車ペインティングの日程においては、この展示活動（本年度1回目）も行った。（図10）



図10：「岩大アート GROOVE IT」の展示作業1回目

本年度1回目の追加展示作品（14点）：

- 「眠る12星座 かに座」「眠る12星座 しし座」希衣子
- 「ゆめかわ世界」島田真愛
- 「久遠」管莉怜子
- 「小さな森大きな鼓動」「美味」橘鈴茄
- 「四季」田村唯李子
- 「のっぽ」「轟」「春」千田彩梨
- 「夏眠」谷地夏美
- 「天空ブランコ」鎌田真緒
- 「茉莉花」「霓裳羽衣」ヨウ シンイク

令和6年2月6日（火）、展示活動（本年度2回目）を行った。今回は、卒業研究としても制作活動を続けていた高橋真奈美（4年）の卒業制作、そして指導教員による賛助作品も他の学生作品とともに展示した。（図11）

（参加者：高橋真奈美、管莉怜子、橘鈴茄、千田彩梨、長岡希歩、引率：本村健太）



## 令和5年度地域課題解決プログラム

本年度2回目の追加展示作品（12点）：

「眠る12星座 おひつじ座 おうし座 てんびん座 さそり座」高橋真奈美

「眠る12星座 ふたご座 かに座 いて座 やぎ座」高橋真奈美

「眠る12星座 しし座 おとめ座 みずがめ座 うお座」高橋真奈美

「泡沫」管莉怜子

「爪先に宿るもの」橘鈴茄

「翡翠」「栗鼠」千田彩梨

「お花見プリンセス」「メロンソーダ」長岡希歩

「映る」谷地夏美

「開花・山吹」「開花・紅白」モトムラケンタ（指導教員の賛助作品として）

展示場所には限りがあるため、このような作品の追加によって、入れ替えて持ち帰る作品もある。



図11：「岩大アート GROOVE IT」の展示作業2回目

## 「岩大アート GROOVE IT」展

私たち岩手大学の学生有志は、「自然」をテーマに自由に発想して制作した作品群を安比高原スキー場に展示しています。

この企画展示の活動は、「groove it」（意味：楽しむ）と名づけました。この「groove」（グループ）という言葉には、「安比高原の自然からえられる感覚や感情」という意味も持たせており、「groove it」には、「このような感覚や感情からの作品制作・展示を学生（作家）の立場で楽しみながら作り上げる」という意図も含まれています。

私たちの作品をご覧いただき、これをきっかけに、改めて自然に目を向け、この自然豊かな安比高原を楽しんでいただければ幸いです。

岩手大学学生有志

### 安比 Art Project

<https://www.appi.co.jp/snow-mountain-resort/art/>

## ○卒業研究「〈八幡平魅力増進プロジェクト〉に関わる作品制作研究」

ここで、高橋眞奈美が卒業研究として実施した内容を紹介します。

卒業論文より抜粋・要約：

今回卒業研究に設定した〈八幡平魅力増進プロジェクト〉にはヴィジュアルデザイン研究室として令和4年度から携わっており、私自身も作品展示や後述のライブペインティングといった活動に参加した。私は最初、企画や作品展示などを通じて大学で学ぶデザインの知識、スキルを外部の活動で活かすことができると考え活動に参加していた。

会議への参加や作品展示などを経験したなかで次年度も研究室の課題として〈八幡平魅力増進プロジェクト〉が設定されることを知り、令和4年度、5年度と長期的に携わることでより高いスキル向上、知見を得られるのではないかと考え、卒業研究のテーマとして設定した。なお、地域課題解決プログラムの採択課題において、令和4年度は「ヴィジュアルコンテンツ制作・企画支援による八幡平の魅力増進～八幡平魅力増進プロジェクト～」、令和5年度は「八幡平の魅力増進のための企画・制作支援 ～安比 Art Project～」と名称が変わっているが、令和4年度からの継続した活動として、〈八幡平魅力増進プロジェクト〉と設定した。

この〈八幡平魅力増進プロジェクト〉は八幡平市、とくに安比高原スキー場に関わる企画や制作を行う地域課題の課題名としてオリジナルに作られたプロジェクト名である。このプロジェクトの根底にあるものとして「安比バレー構想」および「安比 Art Project」が挙げられる。

安比バレー構想は、安比高原や盛岡市を拠点として複数のホテルを運営する株式会社岩手ホテルアンドリゾートが令和2年11月に始動したプロジェクトである。主な目的として、安比高原をグローバルに対応したリゾートへ進化させ、観光・教育・医療（健康）の3つの産業を軸にした街づくりを進めることを挙げている。安比高原は東北の中でも随一の上質な雪質が特徴で、日本のみならず海外からスキーのために多くの観光客が訪れる。将来的に安比高原エリアにおける訪日外国人を含めたスキー場来場者を年間50万人に、その他の産業（ハロウィンインターナショナルスクール安比ジャパンの開校、いわて花巻空港の国際線の運航など）を通じた安比高原エリアの定住者を1万人に拡大することを目標に掲げている。

安比 Art Project は、安比バレー構想の観光産業において新たに計画されたプロジェクトである。スキーオフシーズンの安比高原スキー場の盛り上げが目的であり、その一環として岩手大学で美術を学ぶ学生が企画・提案・実施に携わることになった。第一弾として日本を代表する写真家、映画監督である蜷川実花さんによるアート体験展示「安比 Art Project 蜷川実花 胡蝶の旅 Embracing Lights」が令和4年8月6日（土）から10月30日（日）まで行わ



## 令和5年度地域課題解決プログラム

れた。安比 Art Project に関連して、学生主体の作品展示活動は英語で「楽しむ」という意味の「groove it」を用いた「安比 Art Project 岩大アート GROOVE IT」という名称になり、自然をテーマとした作品を安比リゾート&安比プラザなどに展示することになった。

学生企画としての「安比 Art Project 岩大アート GROOVE IT」にて、私は星座をモチーフにした作品を展示した。当時受講していた講義で古代ギリシア文学『オイディプス王』を読み、今の常識で考えたとしても恐ろしい悲劇に衝撃を受け、古代ギリシア文学、ギリシア神話に興味を持ったことがきっかけである。また、ギリシア神話は芸術分野において題材になることが多く、神話を描いたもの、神を描いたものなどその数は計り知れない。今ギリシア神話を讀んだ私は神話をどのように解釈しどのように作品にするのか、という自分自身への興味もあった。

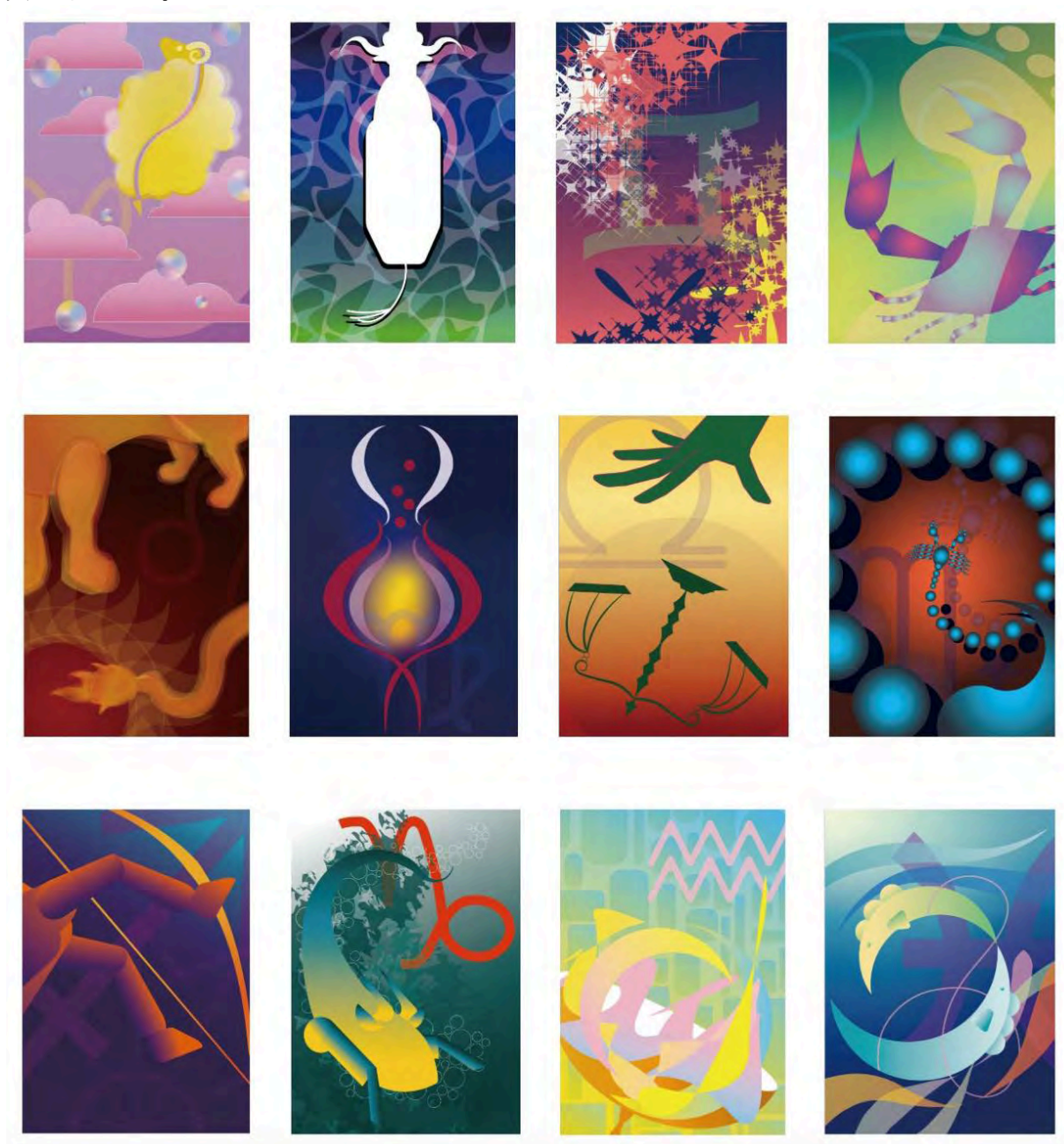


図 12：卒業制作「眠る 12 星座」シリーズ（制作：高橋真奈美）

今回制作した作品（図 12）はすべて Adobe Illustrator を使用している。手順としてはまず制作する星座のマークを制作するところから始める。その後は題材に欠かせない要素を取

## 令和5年度地域課題解決プログラム

り入れつつ大体の構図を決めるパターンと先に作品の背景に用いるグラデーションを決めるパターンの2つに分かれる。これは私自身がギリシア神話を読んだ際に浮かんだ映像、イメージを端的に表すものとしてより近いほうを先に決定したためである。そして題材の要素を1つずつパーツとして制作し、組み合わせながらさらに私が神話から感じた要素を足していくことで完成する。制作順はおひつじ座から始めたものの、その後は作品のイメージを固められたものから順に制作した。作品タイトルには「眠る12星座」という言葉が付き、12作品をまとめて『眠る12星座』シリーズと呼ぶが、これは私の好きな文学作品である谷譲次の『踊る地平線』の語感に近いものとして動詞＋名詞の組み合わせを使用したかったためである。

### ○本研究活動に関わった感想（抜粋）

スキー場を中心としながらも一年中多くの人を訪れる場所にするために、これからの街づくりのために今何ができるか、長期的で膨大な計画だからこそその新しいプロジェクトに関わることができたのは非常に大きな経験であった。特にライブペインティングでは活動を通じてプロジェクトとして伝えたい思いやデザイン・美術を学ぶ私たちだからこそできる表現を考えることができた。また、実際に私たちの考えるデザインと相手の求めるデザインの齟齬がないよう、意見を丁寧に理解する力もデザインにおいて必要だと知ることができた。今振り返るともっとデザインを練ることができたのではないか、学生間でももっと段取りを上手くできたのではないかなど反省点は多いものの、反省点ができるほど熱を込めて活動ができた経験だと考える。

さらに、アートの人を惹きつける力を感じることができた。今回のライブペインティングでは作品や活動を見て興味を示す子どもの姿が多く見られた。これはなに？という疑問からテーマとして扱った「SAVE THE SNOW」を知る話のきっかけになったかもしれない。物事を知るための一歩として、言葉を介さずに表現ができるアートには年代を問わず人を惹きつける力があると感じた。

これまでにない活動として〈八幡平魅力増進プロジェクト〉は岩手県内だけでなく県外へ向けた活動などこれからより展開の幅を広げていこう。この壮大なプロジェクトに岩手大学の学生が関わることができるとは貴重な機会である。これからの活動に注目するとともに、安比高原スキー場、八幡平市の発展を応援したい。

（高橋眞奈美）

### 安比高原スキー場 RESORT 事業統括本部 畠山衣吹さんよりコメント

地球温暖化が進み、暖冬といわれる今シーズン、「SAVE THE SNOW」をコンセプトとした車両が安比高原の雪上を走る姿は、ご来場いただいたお客様に雪を守り、環境を守ることの大切さを伝える一つのきっかけになると思います。

また、安比プラザ前に展示された作品は多くのお客様にご覧いただいております、写真を撮ったり、じっくり眺めたりと、「スキー場×アート」という他にはない新たな切り口に岩手大学の学生の皆様に課題として携わっていただくことができ、大変うれしく思います。

この度は安比高原スキー場での地域課題解決プログラムの実施をいただき心より御礼申し上げます。

### [謝辞]

本研究プロジェクトに関して、安比高原スキー場統括の皆川賢太郎さん、RESORT 事業統括本部の中河正克さん、畠山衣吹さん、八幡平 DMO の柴田亮さんをはじめ、安比高原スキー場の皆様にたいへんお世話になりました。心より御礼申し上げます。